

あそ



2014



遠きミャンマー



朝涼の合歡の若木へ馬結ぶ

佐藤喜孝

あそ

二月

歩道から 佐藤喜孝

白鳥の中に入ってゐる人よ

歩道から浅瀬に入るやうに冬

ときどきは猫にもどれる秋の猫

彩雲は人しれずあり冬の街

紙を漉く裏山で雲生まれつぐ

雲千貫あつめ木菟つくりだす

落羽松實をさげ雲を待ってゐる



現代俳句』二月号よりドナルド・キーン氏のスピーチの一部を抜書きしました。

(前略) 確かに芭蕉や蕪村、一茶など、永遠に覚えられる俳人もあるでしょう。しかし、無数の人が、俳句を作って、自分の感情や喜びや、あるいは悲しみを伝えることができている。本当に日本人は感謝するべきです。第二でもいいし、第三でもいい、大切なことは、「俳句を作ること」です。

(中略)

もう一つ最後にお話ししたいのは、俳句は他の現代芸術と同じように、難しくなりました。あらゆる芸術の中で、私は一番大切なのは音楽です。しかし、現在の音楽には私には全然わからない、音楽とも思えないようなものもあります。俳句にも一種暗号のような、俳人でなければわからないものもあります。私のような素人のために書いて下さったら有り難いと思います。どうもありがとうございます。(拍手)

☆

齊藤裕子

山茶花のふうはり包む蕊の色

ジュリアンや摘めばきっぱりぽきつと言ふ

ジュリアンの茎の確かさぱきと摘む

じんわりと夫の優しさ干し布団

点滴の夢安らなれ冬帽子

子等の部屋夫と静かな日向ぼこ

居眠る夫ただ眺めをり日向ぼこ

寒

襖

篠田純子

青年の晒のまぶし寒襖

嫁が君当り障りの無い神社

寒襖拝みふるへてみたりけり

お雛子が血を沸かせをり寒襖

江戸っ子の意地と気合の寒襖

着膨れてフナッシーのごと飛び跳る

寒襖締込のまま御慶かな

前号正誤

蔦紅葉血は立ったまま立ったまま

私の育った村には洋品店がなかった。年の瀬になると、両親は子供三人を連れて町まで買い物に行った。成長して買い換え時になった物を検討し、リストアップしてあった。大概、ズボンとセーター、年によって防寒着を見て廻った。と言っても店は決まっっていて、両親は二軒の店で買う服を選んだ。まず両親が服を選び、子供の要望も聞いてみる。しかし、子供が余程気に入らないと言わない限り、概、両親の選んだ服に落ち着くのが常だった。

三人お揃いの色違いのセーターを買って貰った事があった。兄が茶、弟は深緑、私がオレンジのセーターは皆がお気に入り、その模様や色風合をも今でも覚えてる。

兄と弟は四才違いだったが、弟は年齢の割に体が大きかった、小柄な兄のお下がり間で間に合うことはまずなかった。育ち盛りの子供達に着る物を調べてやる両親の苦労を、今になって思う。

買ってくれるセーターやズボンは、いつも必ず大きいサイズだった。

鉄砲洲神社で一月十二日に、寒襖が行われると知り見に出掛けた。さして広くない境内に円型のプールが設えてあり、なみなみと水が張られた中に氷の柱が二本漬けてある。定刻になると八十人位の越中禪の男の人達が社務所から出て来て壮観だ。最高齢は八十才とか。いろいろな儀式の後、先導者の号令で「エイッエイッ」と水に入る。その瞬間、神楽殿で威勢のいいお雛子が「テケテンテンテン」とはじまる。

先導者の指示で、浸ったり立ったり、出たりを繰り返す。中には拜んでいるのが震えているのか、ケイレンしているように見える。こちらの方も冷えてきた。寒襖は奇習とも見える。又、江戸っ子の意地とも見える。

師走夕やけ

定梶じょう

燈台がいまシルエツトしぐれけり
人が言ひさうかと思ふ散る木の葉
もの枯れていよいよ遠いなかの道
雪ふるか地蔵に赤のよだれ掛け
今未明戦闘に入れり雪もやう
税務署を出づる真つ向山眠り
バスがもう来る頃師走夕やけて

十二月

須賀敏子

紫陽花の葉のはらはらと十二月
丁寧朝刊夕刊日短かし
上りにも下りも鎖冬山路
冬北斗早口の兄もうをらず
「会いたい」と書く年賀状会へぬまま
迂闊にも舌噛みにけり年の果
スタバにて師走の人を眺めをり

書類函を整理していたら一葉の賀状が出てきた。書きさして宛先がない。裏面には謹賀の二文字とその脇に一句が添えられている。私の字だ。平成十年とあるから相当昔のことだ。四半世紀続けた事業を已めてのち賀状を出すことがなくなって久しいのだが、どういうわけのものか皆目わからぬ。句は「繭玉や平成も二桁となり」。随分だらしない句形だが、こんな句を私が送る相手となると、とくに俳句をやめているが時々消息を交わした東京の友人しか思い当たらぬ。しかし結局投函しなかつたわけだ。相手・投函しなかつた理由いずれも不明ながら、見当をつけた友人であるなら廿歳代の俳句仲間だったから、私の破調癖はそんな頃から、ということになりそう。

初篇平成四半世紀越ゆ

じょう



☆

竹内弘子

思はずも心底見するとき咳

水かけて墓あたらしき青木の実

冬ぬくし小虫を払ふ犀の耳

ひと片食ぬいてすがしき小正月

氏神の手水の皺も寒の月

とびきりの真海鼠を選ぶ市はじめ

手さぐりに廊下を伝ふ寒の月



平常心

田中藤穂

枯葉舞ふ西空巨き星を揚ぐ

年寄れば気力がいのち花八手

赤葱を売る深川のお縁日

星空へ右手に掲ぐる大熊手

冬うらら朝の葉を飲み忘る

法案強行夜の底冷のとめどなく

山茶花や座右の銘は平常心

冷蔵庫

冷蔵庫の扉がピタッと閉まらなくなった。もう替え時だ。電気屋に頼んだら早速持つてくる。若主人と店員とで台所の古い冷蔵庫を引き出して「この冷蔵庫二十一年使ってます。」「そうお、金鶏勲章ものね。」「?」「ああわかんないわよね。手柄を立てた兵隊さんにくれた一番いい勲章よ。」「兵隊さん!」と二人ヒヒヒと笑う。若主人はさすがに「そうですね。家の為によく働いてくれたんですよ。」と言いつつ。「そうですね。家族の為にね。」入れ替わりに少しスリムになった新しい冷蔵庫を据えて完了。古い冷蔵庫に名残りを惜しむ暇はなかったが、空っぽになったその中に、感謝と私の金鶏勲章をつめてありがとう、バイバイ!

年の暮

長崎桂子

北風や透き通る水槽川魚

初時雨心の奥に悲のよどむ

三十三回忌追善終へし十二月

夜半叩く鈴鹿山風雪催

人込にぶつかり詫びる年の暮

数へ日のゆとり持ちたき遊歩して

年つまる六分の出来で良しとする

☆

早崎泰江

冬空に鴝の高鳴きしみとほる

悠然と水を楽しむ冬の鴨

冬の水こゆるぎもせず小鷺立つ

温もりに魅せられて踏む落葉かな

山茶花や庭の箒を新しく

新鮮にナイフひびけり冬林檎

寒夕焼大きな鴉屋根に下り

又しても急激に鈴鹿風が吹き荒れる冬がやって来た、まだ十二月も半ばなのに。

今年は特に早く月日が過ぎ去った感じがした。十月末から親戚、友人の入院に、お祝の行事等、義理ごトが多くそれに自分の歯の定期検診、一年に一回の四日市市の健康診査と本当に慌ただしく今年の後半が過ぎて行き、今やれやれと少しほっとした気分である。

この辺で英気を養い、年末に納めるべき事を無事に終えて、越年したいと願っております。



実千両

森理和

臘梅を差し上げたくて小枝切る

隙間風がまんののがの字強ひらるる

水揚げの水切り今朝も実千両

空っ風幼の後を追ひ続け

青空に冬芽の膨らみ駈ける子等

ガラス拭き峠を越えし年用意

角巻や心根拵げ溶かさねば

☆

吉成美代子

山茶花を切る手ごつごつしてをりぬ

放たれて子犬が二匹枯葉鳴る

引き揚げてローリエ匂ふ大寒波

古民家の軒にずらりと寒鴉

冬日和叩きて銅鑪の照り返す

夜廻り過ぐ明日のものを煮てをりぬ

安全地帯光押し寄せ寒に入る



☆

吉弘恭子

寺の鴟尾さくらもみぢが梵鐘に
わが影を踏みしだきたる竹の春
夕まぐれ月をはさみて鴉かな
時雨の香喉につまらす夜道かな
木枯一番赤い袋の痛み止
山茶花にかこまる隣家離れすぎ
豆柿の空にひといろおきざりに

☆

赤座典子

福寿草一つ嬉しき知らせ来る
屠蘇の盃廻り来笑顔神妙に
両親に家建替しと賀状かな
上野公園大陶器市寒の入
あんぱんとホットコーヒー優先席
乗るほどに薄着の人の初電車
初詣常と変らぬ願ひ事

自詠自読の文章をパソコンに入力していたら何時しか文字が見えにくくなっていた。我が家の猫は保険証を見たら2006年4月生まれになっっている。私が保険会社に登録したものだ。それが2011年の東日本大震災が起きた日の午後、玄関の出入りで出て行ってしまいい何日か帰ってこなかったのが玄関の外にうずくまっていた。(野良だったのが空いていたドアから入ってきたのが最初。)捨て猫を作った人間が悪いのかよくわからないが生まれたばかりの子猫だった。それが居着いてあの3月11日の日の帰宅。片足は骨が出ていた。前足の肉球がなくなっていた。お医者さんも肉球を縫い合わせるのは初めてとのこと。今は元気！犬も猫も人間の勝手でのこのような野良で生きて行かなくてはいけない状態にはしたくない。今寒いので夜は電気座布団から私の布団にもぐりこんでくる。人も猫も体温はあたたかい。

先日テレビで、ベトナムを訪れていたピアニストの辻井伸行が「風が気持ちがいい」と嬉しそうに歩いていた。それを見て、突然十年前を思い出した。そう、ハノイの風は本当に心地よかった。経験したことのない風が、吹き渡っていた。そよ風の中をただ歩いているだけで幸せという感じであった。十月という時期がよかったのだろう。二度目に行った夏は、戸外では何も考えられない程の湿度と熱気だったから。一緒にあのそよ風を満喫した鎌倉喜久恵さんは、今年三回忌を迎える。様々なことを思い出しては、今でもつい話しかけている。

☆

井上石動

穢事万事恐懼謹納除夜詣

甲斐が嶺の赤く染みたりお元日

イクラ数の子あつと失せたるおせちかな

人気なき春日社さんの淑気かな

吾が町も歩けばへくツ初散歩

真司慎司佑都圭佑御慶也

短日や浮雲のなき国に住み

短日の

大日向幸江

生牡蠣にレモンを添へて若やぎぬ

冬空に万才をせる辛夷の芽

句に遊び一喜一憂年忘れ

花言葉小さな喜び冬堇

短日の厨に残る陽のぬくみ

北風吹く厨に道了尊の札

空遠く一刷の紅冬桜

志野流 香道

お隣の都留市にギャラリーあり。知人連中が、折々個展などを開くので足を運ぶ。

或る日ギャラリーに「香道無料体験」のチラシ。ギャラリーの建物つづきの和室で、実演中とのこと。「無料」に惹かれ、ものは経験……と、探険。

これがいいですねえ。派手ではない「みやび」。香木の名前、遊び方の名前、それぞれに風流なる命名あり。

遊びで学生時代、能・禅・弓をやっていたので、芸事は型から……で、形的美しさにひかれ月2回で五千円の大枚も、なんとかやりくりできるか……と句仲間二人で入会。

習い始めて半年。みやびにひたるを主軸にのんきに愉しんでいる。

今年からは、この先生をひきずり込んで、発句・脇で、俳諧を強要してもいる。が、この先生（30代・女性）、俳句初めてにして「うまい」のであります。「年新た」の兼題に

宿題の句作に苦しみ年新た

当日の脇に もつろうとして初日の出見る（注…先生独吟）もつ、負けます。



十二月

木村茂登子

掛け替へる干支の暦のあといくつ

日溜りに吹き溜りゐる落葉

小春日や左右穿き違へてゐる子供

何もせでゐる恍惚の日向ぼこ

明日は裸木落葉掃く

蕪村の筆「夜色」で終る古暦

除夜の鐘捨てているものばかりかな

「モタさんの言葉」

モタさんとは精神科医齋藤茂太氏のことである。

NHK第二チャンネル土曜日午後八時五十分から五分間の放送である、一例をあげると

「他人の悪口は両刃の剣、相手にとって不快だけでなく悪口を言った本人にもイヤな後味が残ってしまふものなのだ。」

一見特別耳をそば立てしめるやうな文章ではない。しかし、朗読する矢田耕司さんの独特な声と調子には思はず引き摺ってゆかれるやうな説得力があり、松木春野さん画くイラストにはほんわかと見るものの心を柔らかく包みこんでくれる雰囲気がある。

近くの図書館でも毎週定期的幼児向けの絵本の読み聞かせをしている。字の読める子供にも読んで聞かせる方が記憶に残る率が高く、効果があるといわれる。

俳句も自作他作に限らず、声に出して繰返すと味わいも深く、また推敲の手立てともなる。と誰方からか伺ったことを思い出した。

一月作品より

舊作を寝押ししてゐる去年今年

佐藤喜孝

過去の作品を推敲している。年去り年来る特別な感慨の中で舊作と向き合っている作者、句に対する厳しい姿が感じられます。それを寝押ししとユーモラスに表現しているところ、俳諧と感しました。

最近「瀨祭」といふ銘柄の日本酒が話題になっています。瀨祭とは辞書によれば、「詩文を作る際多くの参考書を広げること」とある。瀨祭の蔵元も現状に止まらず常に進歩する努力を続けているといっていた。

示唆に富んだ一句と承りました。(茂登子)

夫の背に指でありがとう冬ぬくし 斉藤裕子

冬ながら暖かく穏やかな午後、ご気分がよろしかったのでしよう。

日頃の思いを込めながら、一寸茶目つ気をまじえてご主人の背に指を走らせる。ご夫妻の微笑ましい風情、とおもいつつ一方この時のご主人のお気持ちをなまじ推察出来ませんが、思はず目頭が熱くなりました。

ご家族との強い絆に支えられ一生懸命闘病されている裕子さんの姿に自分の日常を反省させられます。

「あを」の皆が裕子さんのご快復を願っております。(茂登子)

ミントガム噛めばからくて冬めける 定梶じょう

ミントの刺激をからいと感じる。そこに齢を

木村茂登子・佐藤喜孝

いささかでも覚えたのであらうか。以前より口中もことのほかスースーする気がする。「冬めく」の季語の新鮮な扱ひに注目。 (喜孝)

冬の雁ひとにしたしき歩きせ 竹内弘子

弘子さんに少し屈託のあった折の句でしようか。

人には百人百様歩き癖があります。その方はいつもの特徴のある歩き方で現れました。その時弘子さんの心の中に何か解かれてゆくような思いがあったのでしょうか。 (茂登子)

しづめるや木々の月日に添ふべし 竹内弘子

庭木に限ることはない。柿の木なら春には芽を吹き、若葉に輝き、青柿は落果をしながらも秋には柿色の果実を青空に誇らしげに掲げ、様々な色横様に染めた葉を辺りに敷きつめ、雪景色

のなかに人知で凶れぬ枝振りの影を見せる。自然に抗はぬ木々のたつきを、自身のものとして暮しぶり。何とも好もしく羨しい。この静かな心境に添ふやうな季語である。 (喜孝)

陽だまりのやうな人逝き霜月来 田中藤穂

藤穂さんにとってその方は特に親しい大事な方だったのでしよう。長年の交遊を重ねていたその方を失った悲しみを霜月来と季節感に託しているところにかえて強く胸を打ってくるものがあります。句会の帰りは何時も高田馬場まで藤穂さんとご一緒でした。

亡くなられた方からも藤穂さんは、陽だまり、のような人と思われていたのではないのでしょうか。 (茂登子)

凧一号木枯さんの笑顔見ゆ 田中藤穂

ではならない。凧もいつしかなつかしい思ひ出になつてしまった。それにしても、「あを」の句会に来られた二人の先生の併号が申し合はせたやうに「木枯・寒林」とは…………… (喜孝)

坂越えて薄日さし来し帰り花 長崎桂子

「山越え阿弥陀」とか「山越え如来」と題する仏画がある。山の稜線の向ふ側に半身を現して阿弥陀様が描かれてゐる。この句を読んでその阿弥陀様を思った。

坂を越えて晩秋の薄日が射してきた。坂の下には何の帰り花であらうか、ひっそりと咲いてゐる。何回も読んでゐるうちに「坂越えて」の虜になつてしまった。 (喜孝)

冬初め雀に元氣貰ひけり 早崎泰江

冬の初め気弱な作者がゐる。見なれてゐる雀

春、南よりの強風を春一番といふ。戦前は「春」^{はるいち}と云つていたらしいが、このごろは春一番と云ひ、今では三番、四番まであるらしい。晩秋から初冬にかけて吹く北よりの強風を「凧」と云ふ。凧一番とは云はず凧一号といふ。凧二号とも詠まれるケースがある。「返り花木枯一番にも遇ひぬ 瀧春一」といふ詠み方をすることもある。閑話休題。句会ではこの句の面白さを見過してしまつた。凧一号が吹いた。そのことによりふと八田木枯さんを思ひ出した。この木枯一号↓八田木枯といふ連想に○を付けるのをためらつた。

ちよつと前、さうつひ昨日には句会で席を同じくしてゐた木枯さん。思ひ出すと笑顔でしかない。なんとあたたかい思ひ出であらう。「中野坂上」を出て夜の句会場へ来る途中、ビル風の激しいところがある。冬はそこを抜けてこなく

たちがおしゃべりしながら餌を漁ってゐる。そんな光景を見てゐるうち、いつの間には気がつくことさあやるぞと前向きな心持になってゐた。雀に元気をもらふ素直さがすばらしい。(喜孝)

指先に一途な思ひ月明り

森 理和

テレビドラマの一シーンをおもいだした。命の危機を助けられた聾啞の少女が手話で何度も何度も「有難う」を繰り返す。万感を込めたその指先はむしろ音声よりも力強く訴えていた。理和さんのいらっしやったその場はどんなときであつたのかわからないが、手話というもの、又指が示す力というものを改めて考えるきっかけとなつた。(茂登子)

鯛雲ぜんぶ写して高層ビル

吉成美代子

近代建築のガラスの多用が目につく。大地震

ない。

我々はどこから来てどこへ行く。地球も星の一つならいつかは消滅する運命にある。

……度量の広い恭子さんが見つめる縄文の星とは？。(茂登子)

いちやう黄葉すつくと東京タワーかな

篠田純子

スカイツリーと違ひ東京タワーの姿は気取らず庶民の顔をしてゐる。色も赤みがかったオレンジといふのであらうか、青空にも、そしてライトアップされた姿もスカイツリーと比べて目立ちたがり屋である。この東京タワーが銀杏黄葉のなかからすつくと立ってゐる。「すつくと」は脚を広げたやうな東京タワーにふさはしい。「かな」止は東京タワーへの賛辞のやうである。(喜孝)

の時は大丈夫なのだらうかと案ずることもあるが、青空の中に立つて青空と課してゐる姿は今までにない街の風景である。わたしにビルを描かせたら四角いなかに沢山の四角を描くしか術を知らない。

掲句「すべて」と詠まず「ぜんぶ」と普段遣ひの言葉で詠むことで作品がいきいきとした。(喜孝)

縄文の星を見つめむ去年今年

吉弘恭子

除夜の鐘の響きは無限大に心を打つ、希望も反省もエトセトラ。

何万光年という星の光がどうして見えるのか、私にとって永遠の疑問符である。

数字で表せぬ広大な宇宙の中で生物の存在するのは地球だけ(といわれている)宇宙の孤児のような存在なのにそこで争いの絶えることは

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

2014年3月号

◆特集◆
3・11は終わっていない

◆2大インタビュー◆
終わらない慟哭の詩々 高野ムツオ
原発問題と俳句 佐高信
◎東北、北関東在住俳人60名競詠
〈震災〉を詠む、〈原発〉を詠む

〈グラフィック〉
俳句界NOW 安原葉

◆作品21句◆
行方克巳 西村和子 森潮
〈シリーズ〉 結社の未来を考える⑥

◆関東結社主宰座談会◆
古賀雪江 × 高橋悦男 × 星野高士
◆恋愛を詠う◆
文挾夫佐恵 奥坂まや 鎌倉佐弓 他

※セレクトシヨン結社「家」加藤かな文

私の一冊 鈴木節子「門」

魅惑の俳人 榎本冬一郎
佐高信の甘口で「コンチハ！」

対談 鈴木琢磨 (毎日新聞編集委員)

発表! 第六回文学の森大賞

※一部変更の可能性があります。

株式会社文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

數の子や今は無くとも古寫眞	佐藤喜孝
雪吊りや猿のごとき人の影	木村茂登子
さりげなく優しき夫子冬ぬくし	斉藤裕子
蔦紅葉血は立ったまま立ったまま	篠田純子
ミントガム噛めばからくて冬めける	定梶じょう
水鳥の二羽の細波秋惜しむ	須賀敏子
しぐるるや木々の月日に添ふくらし	竹内弘子
凧一号木枯さんの笑顔見ゆ	田中藤穂
坂越えて薄日さし来し帰り花	長崎桂子

冬初め雀に元氣貫ひけり	早崎泰江
卓上にみかんのど飴住所録	森理和
鰯雲ぜんぶ写して高層ビル	吉成美代子
縄文の星を見つめむ去年今年	吉弘恭子
熱爛にひっそり沈む牡蠣二つ	赤座典子
君の声すこしあたたかクリスマス	井上石動
家まるく仔猫まあるく冬に入る	大日向幸江
いちやう黄葉すつくと東京タワーかな	篠田純子
白富士や太郎の塔に次郎の塔	佐藤喜孝



いたのでその十二月号で見出すことが出来たので記してみる。これは毎号掲載されている「実作者の言葉 誓子」の転記である。「こないだA氏から、「風花」第六号に汀女さんの

焚火跡潰えて太き轍あと

が載ってゐることを報じてきた。「轍あと」の最も新しい作例であるが、汀女さんには昭和七年に

秋雨の夜の轍のつづきたる

の句がある。私はそれを「汀女句集」で読んだ。A氏は句会の席で汀女さんに「轍あと」の「あと」は蛇足ではないかと質ねたそうだ。すると汀女さんは「言葉の調子として通るのではないでせうか」と答えられたそうだ。

如上の問題は夙に「童馬漫語」が「わだちの用法」(大正四年七月九日)に於いて論ずるところである。(原文のまま)

後日汀女さんは「誓子さんのあの文章読ませていただいたわヨ」と微笑みながら言われた。

後にも先にもこの風花創刊時に於ける接触が最後であつて次にお会いしたのは築地本願寺の御霊前であつた。(昭和六十三年九月没享年八十八歳)



あをキーワード俳句辞典(きたーきち)

北

辛夷咲く北国の日々遠くなり
北国のひまはり畑終の色
北へ行く吾子見送りぬ冬の雁
夏本番北の南の祭かな
立冬や北の友より長電話
北の旅梅見再び清らけく
しぐれけり西ゆく船も北さすも

期待

啓蟄や一家団欒期待せず
ジャンボ児に期待ふくらむ鯉のぼり
初氷期待をこめてのぞく甕

喜多院

喜多院の五百羅漢に枯葉飛ぶ
野路の鳥嘴を鍛えつ春を待つ
秋うらら反りて屈みて鍛へをり

鍛 ぶ

須賀 敏子
寺門 文明
山莊 慶子

帰宅

北風に指ちぎれむと帰宅せり
帰宅願望翼の欲しき夏の月

北国

辛夷咲く北国の日々遠くなり
北国のひまはり畑終の色
佐保姫の北国に着く便りかな
北国へ移住と決めて大夕焼
北国の球児澆刺春日浴ぶ

北岳

北岳の残雪ひときは厚きまま

基地

捕鯨基地今は静かに日向ぼこ
米基地の金網越しに白き富士

吉日

吉日を選びて雛を飾りけり
おもひだしたやうに賀状の着く吉日

忌 中

古町や忌中の軒の青ぶだう

赤座 典子
松本 米子

須賀 敏子
鈴木多枝子
森山のりこ
芝宮須磨子
赤座 典子

東 亜 未

森 理和
須賀 敏子

森山のりこ
竹内 弘子

竹内 弘子

自詠自読

新参の野良猫がゐる十二月

木村茂登子

家の三軒先は車二十六台収容の駐車場になってい
る。イトーヨーカドーへはここを通り抜けるのが近
道である。イトーヨーカドーの駐車場には常時数匹
の野良猫が屯してをり、通る人を睨みつける。町内
会では野良の犬や猫に餌をやることを禁じている
が、彼等は何とか生きるべきためのルートを持つて
いるようである。

或る年の十二月新入りの大人の一匹が隅の方に
踞っていた。最近野良になったような何となく気に
なる雰囲気をもっていた。ふと、ジャック・ロンド
ンの「荒野の呼び声」といふ小説を思い出した。主

しい気持になり暫くぼんやり眺めている癖がありま
した。今でも月の明るい夜は好ましく思います。

この句は平成二十四年で、九月も十月も満月の夜
は曇りか雨だったのか十五夜のお月様を見る事は出
来ませんでした。後の月もその翌日の月も蒸し暑い
日で駄目だったような記憶が残っております。

今の住所に昭和五十四年から住み、その時から庭
のお世話をして下さいていた方が亡くなられて、何
方かにお願いしなくてはと思いながら年月が過ぎて
庭木は伸び放題見事に成長してしまいました。

其の日は何故か午後の三時過ぎから友人や知人の
出入りが重なり、階下の座敷の雨戸を閉める時間が
かなり遅くなりました。気が付けば満月でも無いの
に月は冴え渡り明るく昼のようで、ひんやりとした
気持ちの良い空気に、庭にある三本の杉の木を見上
げていたら、枝を透かして見える月に薄い雲がゆっ
くりと流れて行く数分間の現象。

ぼうぼうと伸びた木も月光に照らされ影は小さ

人公はバックといふ犬である。バックは裕福な邸で
のびのびと飼われていたが、悪徳な園丁に攫われて
犬糧用の犬として売り飛ばされてしまい、そこから
苦難の道を辿ることになる。主人の残酷なまでの使
役に耐え、一方では犬仲間との絶え間ない勢力争い
に巻き込まれ、疲労と飢えの日々の中で、ある時は
実力で、あるときは掟をかくぐり仲間との熾烈な
戦いを制して序々に野生をとりもどし、ついに頂点
にのぼりつめ咆哮する姿で終っている。

あの新参の猫はどうして野良になったのか、と、
しばらくは後ろ髪を引かれるような思いにとらわれ
ていたが、きつとバックのようにたくましくなつて
ゆくであろうと自分に言い聞かせていた。

庭の木木十一月の月影に

長崎桂子

若い時から長い間、眠る前に部屋の窓の雨戸を締
める時、空を見上げ月が輝いていれば何となく心嬉

く、敷石は美しく見えて私の眼には限り無く趣を感
じるひとときでした。

搔卷の別珍やさし生家かな

井上石動

学校をヒヤヒヤで卒業した年の九月、フランスへ
渡った。中学高校時代で見たフランス映画の、一方
で都会的、一方で純農村の国に興味が続いていた。
さらに、シャンソンを原語で理解したいと。北の北
欧や蘭・独では、あまりにも重い。南の伊では陽気
すぎる。スペインかフランスと。

約五年をフランスで過ごし、帰国した一月十五日
の東京の夜空には、白い浮雲が。ああ、日本に帰っ
て来たんだ。甲府の実家へ帰ると、炬燵に蜜柑。姪っ
子たちがピンクレディーのテレビに夢中。『じゃあ
ゆつくり休んでね』と義姉が用意してくれた床に入
ると、搔卷の別珍が私を包んでくれた。

ああ、日本だ、日本に戻ったんだ……と。

東京タワー③ 吉弘恭子

吉宗のあびしいちやうもみぢかな

枯葉舞ふ千体地蔵の風車

いちやうから鴉群れとぶ増上寺

東京タワーにささる飛行機秋の空

飛翔する鴉に絡む紅葉かな

東京タワー桜紅葉をぬってみる

タワーから冬空に浮くスカイツリー

東京タワーの影がさし込むいちやうかな

踏みしだくもみぢの径へ入り込む

秋空へとびこむ増上寺の鴉



あとがき

『あを』の二〇二〇年度の扉を飾ってくださいました天野公子先生が年頭に「日本書道美術院大賞」といふビッグタイトルを受賞なされた。身辺楽しまぬことの続いてた折、この朗報に目の前がパーツと明るくなった。展覧会場へは都合がつかず残念だったがネットでその余韻を味わった。

今号から阿部寒林氏の玉稿をご紹介させていただきます。汀女さん以後どなたが登場するか楽しみ。有名無名に聞はず印象深かった俳人をご紹介していただけるとありがたい。寒林さんは週三回りハビリに通ふまでお元氣になられた。ただ腰が痛いのが辛いと洩してをられる。暖かくなれば傳句会にお出かけくださるさうで、今から待遠しい。

十二月号までの作品鑑賞を長崎桂子さんにお願ひした。わたしの手の届かないところを見て、書いていただき大いに助かり、且つ参考になった。

一月号作品から木村茂登子さんにバトンタッチ。定梶じょうさんは「自詠自読」で「詠み手と鑑賞するがわの意識を一致させよう、と思わぬ方が、あるいはいいのかも。」と咬いてをられた。作品は発表した時に、読手との間に隙間が生じるやうだ。自作を第三者の目で見るとは句作にとって大切なことである。一番手っ取り早いのは句会に出ることによ

り、独りよがりが大分防げる。聞く耳を持たなければそれも無意味だが。以前田中藤穂さんの句集「水瓶座」を東亜未さんに鑑賞していただいたことがあった。知らぬ言葉も多く悪戦苦闘されたときくが句作力が増したと思ふ。

扉を昨年は画家の寸言を紹介した。作句へのヒントになればと思つたがいかげであつたらうか。少々不安。今年はずえか手元にある数物の絵に、私の旧作一句を組合せてみることにした。数物ではあるがわたしは氣に入つてゐる。

ご厚志御礼申し上げます。

木村茂登子様

二〇一四年二月号

発行日	二月一五日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090 9828 4244
ファックス	03 3371 4623
印刷・製本・レイアウト	竹僊房
	カット／恩田秋夫・松村美智子
	表紙・佐藤喜孝
会費	一〇〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替	00130・6・55526（あを発行所）
	乱丁・落丁お取替えます。